



<講演抄録>14. 活性型ビタミンD3投与がセメント質発生に与える影響に関する酵素組織化学的研究(第18回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	庄司 茂
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	10
号	1
ページ	54-55
発行年	1991-06-29
URL	http://hdl.handle.net/10097/31389

ラグビーの試合中に相手チームの選手の膝が右側顔面部に激突し、上顎骨骨折を生じ、骨折部位の詳細な診断を目的としてX線CT検査を行った。その結果、ダイレクトコロナル像で、眼窩底のbrow out骨折が新たに確認され、他に上顎洞前壁、後壁、頬骨の骨折がアキシャル像で確認された。3D像では、手術前の疾患の概要を把握するのに役立つと思われた。

12. X線CTによる画像診断(2)

○古内 寿, 高橋和裕, 栗和田しづ子, 阪本真弥, 丸茂町子, 三条大助(口腔診断・放射線), 伊藤勢津子, 川村 仁, 茂木克俊(口腔外科1)

X線CTは単純X線撮影では描出することが困難な軟組織や、硬組織に重なり読影できない部位、3次的に複雑な形態をしたものを正確に写し出すことを可能とした。特に、頭頸部領域の軟組織疾患は、解剖学的複雑性のため、臨床的にも病変の部位を特定することが困難であり、また単純X線撮影では描出できない。そこで今回、病変の3次元的位置関係の把握や、病変内部の性状についてX線CTが有効であると思われた症例を経験したので報告した。

症例1は48歳男性で7相当部の頬部軟組織内に約 1.5×4.5 cmの弾性硬の境界明瞭な腫瘍を触れた症例で、触診では病変の位置の特定が難しかったが、Axial CT像で左側咬筋前縁に約 3×2 cmの嚢胞様の像を認めた。嚢胞の一部には隔壁が形成されており内部のCT値は約40であった。嚢胞摘出術を行いトーフ粥状の内容液が見られ、頬表皮嚢胞の確定診断が得られた。

症例2は19歳男性で右側頬部に腫脹が生じた症例で、既往歴として生後5カ月と12歳に頸部リンパ管腫の手術を行っていた。Axial CT像で頬脂肪体の部分に約 3×2 cmの頬三角形の腫瘍が確認され、CT値は約50であった。また右側耳下腺の内方に直径約2 cmの頬円形の腫瘍が新たに確認されたためdirect coronal像を撮影したところ、耳下腺内方の腫瘍はさらに明瞭に抽出され、 47×22 mmの不整形、境界明瞭であった。頬部腫瘍摘出術を行いリンパ管腫の確定診断が得られた。

以上、軟組織疾患ではX線CTが有効であったが、X線CTは患者の被曝量が大きいため有用性と被曝量との十分な考慮が必要であると思われた。

13. 咬筋前縁から内方にかけて発生した頬表皮嚢胞により開口障害を示した一例

○伊藤勢津子, 鎌倉慎治, 加賀谷智子, 後藤 哲, 長坂 浩, 川村 仁, 茂木克俊(口腔外科1)

頬表皮嚢胞は胎生期に於ける外胚葉の迷入、或は後天的な外傷や感染時の変性上皮の迷入により生ずると考えられ、身体各所にわたり発生します。口腔領域では口底部に発生頻度が高く、頬部には比較的稀です。

今回、我々は咬筋前縁から内方にかけて発生した頬表皮嚢胞により、開口障害を示した一例を経験しましたので、報告しました。

患者は48歳の男性で、左側頬部腫瘍の精査を主訴に、1990年7月25日当科受診しました。既往歴として、高血圧にて、5年前より薬物服用中です。家族歴に特記事項はありません。現病歴としては、1988年左側頬部に拇指頭大で無痛性の腫瘍を生じましたが2~3週間で縮小し、その後も、年に数回同様の症状を繰り返していました。1989年10月より、同部の腫瘍が増大し、1990年5月、腫瘍による開口障害を指摘され、同年7月、紹介により当科受診しました。現症は、左側頬部に軽度の、び慢性腫脹を認め、最大開口度は25 mmでした。左側頬粘膜に、 15×45 mmの比較的境界明瞭で、弾性硬の、無痛性腫瘍を触知しました。CT撮影により、咬筋前縁から内側にかけて、耳下腺とは無関係で咬筋を外側に圧排した嚢胞様の像を認めました。

左側頬部嚢胞の臨床診断のもとに、1990年8月2日、全身麻酔下で口内法により摘出術を施行しました。術中、一部豆腐槽状の内容液の流出を認めましたが、嚢胞を一塊として摘出しました。

病理組織学的診断は、頬表皮嚢胞でした。

術後は経過良好で、最大開口度は45 mmを示し、開口障害は改善されました。術後4カ月を経て、現在再発傾向を認めません。

14. 活性型ビタミンD3投与がセメント質発生に与える影響に関する酵素組織化学的研究

○庄司 茂(歯科保存1)

歯周疾患に罹患した歯に対して、歯周外科手術が広く行われている。しかし、手術後の歯肉の退縮を未だ防ぐことが出来ず、結合組織性再付着を十分に得られないばかりでなく患者の審美的要求の面でも多くの問題を残している。この原因としては、手術後に歯根表面で生じる上皮細胞の深行増殖の速度が、歯根周囲の

未分化間葉系細胞から誘導され歯根表面にセメント質を形成するセメント芽細胞の発生速度を上回るためと考えられる。従って、セメント芽細胞の分化を誘導しセメント質形成を促進することが可能ならば、歯周外科処置後の歯肉退縮を防ぐばかりでなく、結合組織性再付着が十分に得られた完全な治癒が期待できる。

本研究は、低アルカリフォスファターゼ血症患者の歯にセメント質形成不全が観られることより、アルカリフォスファターゼ (ALP) とセメント質形成との関係に着目するとともに、医科において代謝性骨疾患の治療に用いられている活性型ビタミン D3 (1α (OH) $_2$

D $_3$: VD3) がセメント芽細胞の分化そしてセメント質形成に対し、どのような役割を果たしているかについて、VD3 をプロピレングリコールを溶媒とし、250 ng/kg を生後 3 日目のラット腹腔内に 12 日間連続投与し、灌流固定—脱灰—凍結切片作製—ALP 染色—包埋—薄切—透過型電子顕微鏡観察を行った。

VD3 投与により、ラットの体重増加は抑制され、血清中の無機リン量も増加を抑制されたが、カルシウムは倍近い増加を示した。また、歯頸部付近の無細胞性セメント質の発現や形成に対し、VD3 は抑制的に作用した。